

連れてって  
立ち読み

退職後に趣味でウクレレを始めた。

その日もリビングでぼろぼろやってた。

すると妻が、*Take me take me with you*をやって、と言った。

アポロの飛行士が月面で聴いた曲だっけ……？ ドラマで流れて気に入ったらしい。

おあいご用だ、とインターネットで歌詞とコードを検索した。

難しいコードはなさそうだ。

タブレットの画面に表れた英文を弾き語った。

そしたら。

あれ？ と気がついた。歌詞の意味。

「……こんな歌だったんだ」

「どんな歌？」

コーヒーの茶色に俺の顔が映ってた。

「古い話をしているのかな？」と尋ね返した。

妻が頷くのを確かめてから語り始めた。

寛明大学の一年生だった頃の話だよ。オレは法学部だったんだけど、法律とは全然関係ないサークルに入ってた。シャイニーレモンって名前のテニスサークルと、それから文学研究会。

テニスサークルはまあ普通に軟派なサークルだった。康平女子短期大学や称美女子短期大学の女子たちと伊豆や清里のペンションに行って、テニスはほとんどやらずにお茶を飲んだりウノをやったりしてた。情報誌の原稿チェックで稼いだ金で中古の軽自動車を買って……、いや、そうなんだ、みんなはもつといい車に乗ってたよ、まあミツション系の学校に比べたら寛明は、ほら、パンカラって感じだしね、だからサブやプロジェクトには乗ってなかったけど、でも中古の軽ってのはさすがにね……、だよ、だけど当

時のオレにはそれが精一杯だったんで、まあ満足して、リアシートにテニスラケットやウインドブレーカーを載せて、ナビゲーターズシートにうさぎみたいな女子やとんびみたいな女子を入れ替わりで乗せてた。

おいおい今さら嫉妬するなよ、それにね、これでもオレは硬派だったんだぜ、軟派なサークルにいたわりには、つてことだけど。その証拠に称短の子と三ヶ月付き合っただけ深い関係にならなかった。

一方の文学研究会は硬派でも軟派でもなく、半端な感じだった。薄汚れた学生棟の中にある小さな部室、通称ボックスつとこでじめじめ活動してた。行くと床に一升瓶が転がって隣に知念先輩が転がってた。知念先輩っていうのは日本文学部、通称日文の二年生で、つり目で天パでひげもじゃで、小さい頃から何かの障碍を抱えてて、だからニンジンみたいな手をして、くねくね歩いて、ろれつの回らないしゃべり方してたんだけど、そんな個性も目立たなくなってしまうほどに目立った大酒飲みだった。そして

ありがとうございました。